

● 西田 愛 特定准教授 *Ai NISHIDA (Associate Professor)*

研究課題：西チベットにおける古チベット語岩石碑文の総合的研究

(A comprehensive study of Old Tibetan rock inscriptions in Western Tibet)

専門分野：古代チベット史、チベット文化史 (Old Tibetan history, cultural history of Tibet)

受入先部局：人文科学研究所 (Institute for Research in Humanities)

前職の機関名：神戸市外国語大学 外国学研究所

(Kobe City University of Foreign Studies, Research Institute of Foreign Studies)



20 世紀の初頭に敦煌石窟をはじめとする中央アジアの諸遺跡から出土した古チベット語文献は、古代チベット帝国（7～9 世紀）の社会状況を正確かつ具体的に伝えてくれる第一次史料であり、チベット文化の最古層を知る貴重な手段でもあります。私はこれまで、これらの出土資料の中でも占いに関する文献を中心に研究を進めてきました。そして、古文書中の占いが如何にして現代社会へと継承されているのかということにも関心を持ち、チベット文化圏の各地へ足を運んできました。その一環として訪れた西チベットのラダック地方には、短い古チベット語刻文のある岩石がインダス川沿いの複数地点に散在することが知られています。しかし驚くべきことに、現地ではこれらの刻文を持つ岩石が建材利用の目的で破碎されつつあります。そこで、未だ本格的な調査が行われていない岩石碑文について直ちに記録を開始する必要があると考えるに至りました。今まさに失われつつある岩石碑文について総合的な研究に取り組み、その歴史的意義を明らかにすることが本研究の目的です。

The Old Tibetan documents recovered from the Dunhuang manuscripts of the Mogao Cave and the other sites in Central Asia are well-known historical sources. These important primary materials provide first-hand information on both the social situation during the Old Tibetan Empire period (7th to 9th century) and the ancient culture of Tibet. Among these documents, I have focused especially on divination texts. In addition, I have visited several Cultural Tibetan areas to examine how these documented divinations were transmitted from past to present. Ladakh, one of my field research areas in Western Tibet, features many boulders spread out along the Indus River that exhibit short Old Tibetan inscriptions. In the course of my studies in Ladakh, I came to realize that we urgently need to record these uninvestigated rock inscriptions because the inscribed boulders are currently being destroyed to produce building materials. My research project aimed to demonstrate the historical significance of these rock inscriptions in Western Tibet, which are currently being lost.



地図 - 1：研究対象地域の概略図、筆者作成

チベット史における西チベット

7 世紀にチベット史上初の統一国家を築いた古代チベット帝国（吐蕃）は、建国後ほどなくしてスムバをはじめとする東北の諸部族、西チベットのシャンシェン王国を統合し、チベット高原の覇権を握りました。

やがて中央アジアへも拡大路線をとり、河西地方とともにシルクロード南道（西域南道）からおそらくパミール高原の一部までを支配下に入れることに成功しました。しかし、842 年に帝国最後のツェンポ（皇帝）が暗殺されると、後継者争いによってチベット帝国は事実

上崩壊します。後継者候補の一派からは少なくとも三系統の王国が誕生したことが知られていますが、中でも、西チベットのグゲ・ブラン王家は仏教復興事業を行ったことで後代の仏教史文献にも詳細な記録が残されています。現在の区分で言えば、概ね中華人民共和国・西藏自治区のンガリ地域からインド・ジャンム・カシミール州のラダック地域、パキスタンが実効支配するバルティスタンにかけての地域を含む西チベットは、帝国が中央アジアへの足がかりとして進出した地域であり、帝国崩壊後に皇帝家の末裔が王国を建てた地域であるとともに、チベットにおける仏教復興の窓口となった地域でもあります。私が研究対象とする古チベット語碑文史料が散在するのは、ラダックの中心地であるレーから西へ向かうインダス川下流沿いの地域（下ラダック）、バルティスタンにかけての地域になります。



写真 - 1：岩石碑文のロケーション、筆者撮影

岩石碑文から何がわかるのか

西チベット地域の古チベット語碑文は、形体的には、岩肌に刻まれた磨崖碑文と花崗岩の巨石に残された岩石碑文の二種類に大別できますが、録文点数、発見地点数ともに後者が前者を圧倒しています。しかし、一点ごとの録文が短く、一見したところ落書きのようにも見える岩石碑文は歴史学的にも考古学的にも十分な価値を付与されてきませんでした。これらについて、初めてまとまった研究を行ったのは私の指導教官でもあった武内紹人氏でした。武内氏はラダックのアルチ、カラツェ地区にある 112 点の岩石碑文の録文パターンを検証し、そこから氏族名や役職名などを抽出することに成功しました。これにより、今まで知られていなかった当該地域の氏族の活動が初めて知られるようになってきました。私の研究では、氏の研究手法を西チベット全域の岩石碑文に援用し、地点ごとに氏族の出現頻度を整理することで、各氏族の分布と活動域を検証しようと考えています。

近年、考古学の分野からも新発見の岩石碑文が続々と報告されています。それによれば、武内氏の報告する録文パターンと同系統の岩石碑文が、インダス川沿いのみならず、北側に位置するインダス支流のシャヨク川沿いにも発見されているのです。シャヨク川を北上するとカラコルム峠に当たり、帝国期にチベット軍が支配していた西域南道へ向かうルートへ抜けると考えられます。岩石碑文の残された地点が何を意味するのか、名前を残した氏族たちは何者なのか、後代の史書には登場しない人々の活動を明らかにしたいと考えています。



写真 - 2：岩石碑文の例、筆者撮影

西域南道の古チベット語木簡

かつて古代チベット帝国の軍事拠点が置かれていた西域南道地域のマザルターグやミーラーン、今の区分でいうと新疆ウイグル自治区の南部に位置するこれらの地域からは、チベット語の記された木簡が 2,300 点ほど見つかっています。その大部分が、砂漠の中でも入手可能なタマリスクの小片を利用した幅 2 cm 程度の小型の木簡です。紙文書に比べると一点ごとの記述は短いものの、軍事拠点における食料の調達や宗教儀礼など、当時の日常が垣間見れる内容をもつ点で、木簡もまた古代史研究にとって貴重な資料であると言えます。特に私が興味を持っているのは、役人の任命や手紙、貸借契約に関する木簡などにみえる人名です。これらの人名の中には、凡そチベット人らしからぬ名前も多数見受けられるのですが、全体の整理は未だなされていません。そこで、木簡から抽出した人名を軍事拠点ごとに整理し、兵士や役人の出自を明らかにする試みに取り組んでいます。さらに、その知見を敦煌文書中の人名や岩石碑文の氏族名と照らし合わせることによって、帝国期から帝国崩壊後にかけての人々の移動を跡づけることができるのではないかと考えています。